

会議記録

会議名称	第1回 杉並区基本構想審議会「第3部会」
日時	令和2年10月19日(月) 午後5時57分～午後8時02分
場所	中棟4階 第1委員会室
出席者	委員 大竹、牧野、泉、タケカワ、杢尾、本郷、山ノ内、富田、岩田、 西山、本城 区側 子ども家庭部長、教育委員会事務局次長、教育政策担当部長、 地域活性化担当部長、済美教育センター所長、企画課長、 教育委員会事務局庶務課長、子ども家庭部管理課長、文化・交流課長、 企画調整担当係長
配付資料	○全部会共通資料 資料22 杉並区基本構想第1回・第2回全体会の意見概要 資料23 杉並区の将来人口推計について(平成30年(2018年)時点での推計) 資料24 すぎなみのまちの動き～土地利用現況調査結果の分析～ 資料25 持続可能な開発目標(SDGs)について 資料26 「私が部会で議論したいこと(審議のポイント)」の一覧について ○第3部会資料 資料1 第3部会の審議の進め方(案) 資料2 他部会委員等から第3部会への意見一覧
会議次第	1 開会 2 部会長挨拶 3 副部会長指名 4 議事 (1)部会の進め方について (2)意見交換(審議のポイントについて) 5 今後のスケジュールについて 6 閉会
傍聴者	1名

会議の結果	<p>○部会審議の進め方について、部会の審議日程を1回追加して、全5回することの了承を得た。</p> <p>○第3部会が所掌する各分野における審議のポイントなどについて、区が提示した資料等を踏まえ、委員間の討議を行った。</p>
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

○部会長 それでは、定刻より少し早いのですが、皆さんおそろいですので、杉並区基本構想審議会第3部会の第1回の審議を開始いたします。

本日は全員が出席されていますので、本会が有効に成立していることを報告いたします。

まず、部会の開催に当たり、杉並区基本構想審議会運営基準第4条第3項の規定により、部会長の職務代理である副部会長は、あらかじめ部会長が指名することになっております。副部会長は、部会審議の円滑な運営や資料整理など、私、部会長の補助的な役割を担っていただきます。副部会長には牧野委員を指名させていただきますので、ご了承をお願いしたいと思います。

牧野委員、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これから部会審議を進めていくに当たり、共に議論するメンバーを改めて確認できればと思います。副部会長、本日のご出席の委員の順にご指名いたしますので、お名前など、簡単に自己紹介をお願いできればと思います。

では、副部会長、よろしくお願いいたします。

○副部会長 皆さん、こんばんは。牧野です。よろしくお願いいたします。

今、東大で教鞭を執っております。専門は、社会教育、生涯学習ですけれども、子どもたちを含めて、まちづくりですとか、チームでどのような活動をしていくかということについて、いろいろ考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 時計回りでよろしいですか。

では、順次お願いいたします。

○委員 皆さん、こんばんは。西山知樹と申します。よろしくお願いいたします。

この第3部会のテーマの一つでもあります子どもにおそらく一番近い存在だと思うので、張り切ってできたらなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員 はい。通訳案内士の本城智子と申します。

杉並区荻窪で自分も育って、子ども2人も育てました。次の世代、子どものまた次の世代のために、杉並区がよりよくなるように考えていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○委員 杉並区立中学校PTA協議会顧問の本郷辰博と申します。

私はPTAの会長を全部で4回やって、そのうちの2回、小P協と中P協の会長をしてまいりました。杉並区の会議も何度も出させていただいているのですが、子どもたちの教育のためにいろいろ尽力できたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○委員 こんばんは。杉並区体育協会の杉尾と申します。

もともと杉並区テニス連盟の会長をやっております、競技系ではテニスという形で東京都テニス協会の役員もやらせてもらっています。スポーツという切り口での見方が強くなるかなと思いますが、よろしくお願いいたします。

○委員 皆さん、こんばんは。山ノ内凜太郎と申します。今回、教育委員会の皆様にご推薦いただきまして、この場におります。ふだんは、ワークショップデザイナー、ファシリテーターとして、会社を自分で立ち上げておまして、今、中瀬中学校や杉十小学校でCS委員等々、担当させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員 どうも。コラムニストの泉です。

前回もお話ししましたように、杉並で暮らしまして、28年ぐらいになります。ふだんはまち歩きのエッセイなんかを書くもので、このアンケートもそういった話を書いたんですけども、劇場の座・高円寺の評議員をやらせていただいているのと、中央図書館で主催する「本の帯大賞」の審査員をもう15年か20年ぐらいやっていますので、そういった方向の助言などもできるかなと思っております。よろしくお願いいたします。

○委員 どうも。タケカワユキヒデです。

家内が杉並の宮前で生まれ育ちまして、それで、結婚して半年ぐらいで私はマスオさんになったので、もう四十何年間か、ずっと杉並に住んでいます。子どもも多かつたし、家内もPTAの会長もやりましたので、その辺のこととか、もちろん音楽関係のことに関しても、いろんな話をさせていただければと考えております。よろしくお願いいたします。

○委員 皆さん、こんばんは。区議会の岩田いくまと申します。

私も、子ども3人のうち、まだ2人が区立の中学校におります。スポーツでは、私はバレーボールをやっております、昨年までは障害者の人たちに14年ほど教えて、今は小学校で月2回ぐらいですけども、教えております。今後ともよろしくお願いいたします。

○委員 皆さん、こんばんは。杉並区議会議員、日本共産党の富田たくです。

杉並区内では、昔遊びを教えるボランティアをやっております、こま回し、けん玉、お手玉など、学校のイベントや地域のイベントでやっております。最近コロナでそういったイベントができなくなっているので、今年は全然活動ができていませんが、子どもたちの居場所を大事にしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 遅くなりましたが、私から自己紹介をさせていただきます。立正大学に勤めております。専門は子ども・家庭・福祉で、大学の教員になる前には、乳児院というところ

で、里親担当のワーカーをやっておりました。学生のおときは、2年間、世田谷にある児童養護施設で住み込みをさせていただいて、昼間は大学へ行って、夜は子どもたちのところに帰ってきて、そこでの生活をするという、そんな生活を2年間させていただいてきました。ですから、要保護児童とか要養護児童という子どもたちとの関わりがすごく多く、社会的養護のあり方についてが一つの研究テーマになっています。

しかし、自分の子どもが今27と24になりましたけども、小学校時代のPTA会長等やっていくときに、一般の子どもたちの発達にもいろいろな課題を抱えているなというようなところを感じました。最近では、児童養護施設の子供たちはいつも社会の底辺層だと思っていたら、私の地元の児童養護施設の子供が、母子家庭のひとり親家庭の子供のクラスメイトに向かって「そんな生活しているなら、施設に来たら？」という言葉かけた。その子供は、夏休みはどこも出かけることもできなで夏休み中は児童館とかに行って時間を過ごしている。給食があるときはいいけれども、給食がないとき等は、3食十分な食事を食べられず、1日2食になる。施設の子供たちはいろいろキャンプとかに行けるけど、その子供は夏休みに何の行事もない。昔は本当にその逆であった。今7人に1人が子供の貧困と言われている社会にあって、杉並も豊かだと言われているけれども、よく見れば、まだまだ苦しんでいるお子さんたちも、杉並にもいるのではないかと。

そういったところに光を当てて、「子ども、文化、スポーツ、学び」と、子どもたちの全般にわたって、それぞれの専門家の方々のご意見を取りまとめながら、明日の子どもたちのために、今を生きる子どもたちのために私たち大人ができること、そして若い声も反映させながら、まとめていければいいかなと思います。いろいろなご意見を頂ければ幸いです。どうぞよろしく申し上げます。

それでは、議事に入る前に、本日使用する資料と会議の全体のあらましについて、あらかじめ皆さんと共有したいと思いますので、事務局から説明をお願いしたいと思います。

○子ども家庭部長 よろしくお願ひいたします。

この部会の事務局のリーダーを務めさせていただきます、子ども家庭部長の武井です。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、本日の配付資料と議事内容について、簡単にご説明いたします。

まずは、配付資料の説明です。最初に、全ての部会に共通の資料として、資料22「杉並区基本構想第1回・第2回全体会の意見概要」がございます。

次に資料23が「杉並区の将来人口推計について」、資料24は「すぎなみのまちの動き」

という冊子でございます。資料25が「持続可能な開発目標（SDGs）について」です。資料26は皆さんからお出ししていただいたものをまとめたものですが、「私が部会で議論したいこと（審議のポイント）」の一覧です。

次に、これは第3部会のみ資料でございますけれども、資料1として「第3部会の審議の進め方（案）」と、資料2としまして、「他部会委員から第3部会への意見一覧」がございます。

資料は以上です。資料の不足などございましたら、事務局にお声がけをお願いします。

次に、本日の議事内容でございますけれども、第3部会の今後の議論の進め方についてご確認を頂いた後に、当部会で審議するポイントについて意見交換をしていただきたいと考えております。

続きまして、全部会共通の資料につきまして、企画課長から説明をいたします。

○企画課長 企画課長の山田でございます。全部会に共通する資料22から26について、簡単にご説明をいたします。

まず、資料22は、第1回、第2回で出された意見をカテゴリごとに取りまとめた資料でございます。続きまして、資料23は、将来人口推計でございますけれども、第2回の全体会で、委員から、将来人口の推計に関するご意見を頂きました。第1回全体会の資料13の中でも、一部、区、東京都、全国における人口動態についての資料をつけさせていただいておりました。

また、現行の総合計画、実行計画の冊子もお配りしておりますが、本日お渡しをした資料23につきましては、その総合計画、実行計画、平成30年時点で行いました最新の将来人口推計を抜粋して、転記させていただきました。

この、区の将来人口推計は、総人口は、これから令和16年に約59万5,000人余でピークを迎えて、その後減少に転じるという見込みをしているものでございます。

また、生産年齢人口など、年齢3区分別の人口、さらに5歳階級別の人口構成の今後の変化の予測などもお示ししております。

この推計の方法は、概要に記載をしております。今後の大きな人口動態のトレンドということでお示ししておりますので、議論の参考にしていただければと存じます。

次に、資料24は「すぎなみのまちの動き」という区が作成した冊子でございます。

これについても、第2回の全体会で、議論の前提として区の特性や特徴を示すようなもの、杉並の広い地域で、それぞれ地域の特性を示す資料がないかというご意見を頂きまし

た。

この冊子は、東京都が行っている、法に基づく調査の内容に、区独自の調査の内容も加えて作られており、平成31年の3月に刊行されたものでございます。

中身はかなり幅広く、いろいろな区の状況が載っております。例えば、冊子の2ページですと、交通網の図も載っております。それから、資料の6ページでは、土地の利用の状況、宅地率の関係が、9ページでは、用途地域、住居系あるいは商業系、工業系といった、用途地域に関する資料も載っております。いろいろと図表もつけまして、すぎなみのまちがどういう状況なのかということをお示しができる資料として本日配付をさせていただいております。

資料25でございますが、これも全体会でご意見を頂きましたSDGsについての資料です。SDGsにつきましても、これまでも一部、資料の中で言及はしておりましたけれども、分野横断的な幅広い視点を持った国際的な目標であるため、SDGsと自治体が行う施策との関連づけがどうなっているかというご意見も頂きました。

一方では、SDGsについて、まだよく聞いたことがないというご意見も頂いているため、まずは、SDGsの概要と、奥副会長からご提供いただいた資料の4ページ・5ページでSDGsのゴールと自治体の行政の関係を表したものを、委員間の共通の認識を図るため、本日お示しをさせていただきました。

最後に資料26でございますが、大変恐縮ですが、一部修正がありましたので差替えさせていただきます。大変申し訳ありません、

修正箇所は、2ページ目の一番上から二つ目、分野の防災、キーワード、水害の減災対策というふうに転記を間違えておまして、キーワードの二つ目が震災救援所の運営、についてのキーワードでしたので、誤りがございました。大変申し訳ございません。

この資料は、皆さんから頂戴した「私が部会で議論したいキーワード」、三つずつ皆さんからお出しいただいた内容を、共有化するため部会ごとに網羅的に記しているもので、分野横断的にいろいろご意見いただいております。これもまた議論の参考としてご活用いただければと存じます。私からは以上です。

○部会長 ありがとうございます。

ただいま事務局から、追加で配付された資料のご説明もありました。ご質問等ありましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

(なし)

○部会長 また追ってあれば、質問いただければと思います。

それでは、先に進めさせていただきたいと思います。本日の会議終了は8時を目途にしたいと思います。効率的かつ委員同士で活発な議論を行っていただければと思います。

それでは、議事の一つ目は、部会全体の進め方になります。先日行われました第2回の審議会全体会におきまして、部会審議の進め方が示されていました。これを基本としつつ、各委員の共通認識の下、より円滑で深みのある議論が行えるよう、この間、事務局と共に検討をまいりました。

その内容について、まず、事務局から説明をお願いいたします。

○子ども家庭部長 それでは、私から説明いたします。

先日の第2回の審議会全体会では、部会の審議の進め方については、1回目から3回目まで、各部会でそのテーマごとに検討し、4回目でまとめる流れでご説明させていただいたところです。その後、正副部会長のご意見をお伺いしながらその進め方について検討し、議論を進めるに当たり、以下のような課題があるのではないかと考えました。

一つ目は、全体会は既に2回行いましたが、委員の方が多数出席され、時間の制約がございましたので、各委員の課題認識や将来を見据えた視点などのご意見を伺う機会は十分に持てたとは言えなかったということ。

二つ目は、本日、資料26として委員の皆様のご意見を頂いているんですけども、内容が相当多岐にわたっていることと、また、区の（テーマの）示し方がよくなかったのですが、「子ども」の分野で、子どもに関するご意見は出ているんですが、子育てに関する意見が十分に出ていない、その辺の偏りもある状況でございます。

当初は、第1回目から各テーマを検討することにしておりましたが、以上の点を踏まえ、改めて部会の進め方についてご確認を頂いた上で、本日は、各委員の課題認識などを自由に発言していただく機会にできたらなと思っております。

その結果、当初4回で予定していたものを、次の第2回から第4回でテーマの議論をして、まとめは第5回目ということで、1回開催を増やして、やらせていただければと考えています。第5回の日程は12月の後半になってきます。年末ですので、皆様もかなりお忙しくて、なかなか日程調整がどうしても合わないというときには、最後のまとめですので、メールで開催することも視野に入れながらやらせていただければと考えております。

次に、各テーマの審議ですけれども、文化とスポーツについては同じ回とすることにしたしまして、審議の順については、第2回は「子ども・子育て」の関係、第3回に「文化・

スポーツ」、第4回に「学び」という形で、できればと思っておりますが、その回のテーマに関してだけを論議するというだけではなくて、他の分野にまたがる意見が出されたときには、可能な限り、そこで議論するというような形で進められればと思っております。

また、各テーマの審議の際に、皆様が必要とされる資料もあると思っておりますので、頂いたご意見を踏まえて、各回の審議に間に合うようにご用意できればと思っております。

開催回数を増やしてやらせていただきたいという提案でございます。よろしく願いいたします。

○部会長 はい。ありがとうございました。

事務局からの説明のとおり、当初4回と思っていたのですが、皆さんからのご意見等を踏まえると、4回では不十分であるし、せっかく参加された皆さんからの生の声をここでやっていくことによって議論が活発化するのではないかというようなこともあり、1回増やして5回にしたいと。最後、5回目は12月末で、日程調整は極力いたしますが、まとめの部分であるので、もし不可能な場合には文書等でやり取りさせていただいて、最終的なまとめをする。この部会では、本質的には参加させていただいて直接議論をするということで、それをまとめていきたいと思っているので、4回を5回にして時間をしっかりと取って、やっていきたいということです。

ご質問、ご意見があればお願いしたいと思います。どうぞ。

○委員 回数を増やしてしっかりとやることはすごく重要だと思うので、5回開催に変更はすごくいいことだと思います。

先ほど「子ども」の分野で、子育てについて意見があまり出ていなかったという話をされていたと思うんですけども、今後の第2回の子どもの分野別の審議のときに、子育ても含めた議論をしていくという認識でいいのかというのが1点と。

「学び」で言うと、すごく悩みどころだなと思っているんですけども、小・中・高・大学を卒業して、専門学校やそういった教育機関を卒業した後の生涯学習的な学びという部分と、杉並区として責任を持っている公教育という部分と、大きく分けて二つあると思うんですけども、その公教育という部分については、「子ども・子育て」の分野にもすごく関わってくると思うんですね。なので、この第4回の「学び」というのが、公教育と生涯教育、生涯学習を含めてやるのか、それとも「子ども・子育て」の第2回目のところでも、公立小・中学校の学びというのを含めて議論するのか、その辺はどういうふうに考えたらいいのかなと思ひまして。以上2点です。

○部会長 では、事務局、お願いします。

○子ども家庭部長 まず1点目ですけれども、「子ども」と言った場合に子ども自身の成長で言いますと、それも非常に重要なテーマであります、やはり子どもを育てるという保護者側の視点というのも同様に非常に重要ですので、「子ども」では、子育ても含めてご議論いただければと思っています。

それから、2点目ですけれども、後で教育委員会事務局次長に補足していただければと思っていますが、委員がおっしゃるとおり、子ども・子育ての部分と、学び・教育という部分は重なる部分が大変多いですので、どちらで議論するというより、子どものほうから入る、学びのほうから入るといふ、最初の切り口としてはそうですが、具体的な中身で、「子ども」をやっているときに「学び」の話が出ることは当然あると思いますので、そのときには、先ほど申し上げたように可能な限り議論するという事で、どちらの回でやらなくてはいけないという形にはしないほうがいいと思っています。

○部会長 ほかにありますか。

○教育委員会事務局次長 はい。今のご質問については、やはり学びという概念は非常に広いので、全ての世代に学びというものは必要です。第4回目の「学び」のときにだけ教育を語るということではなくて、ほかの分野と垣根があるわけではないと思うんですよ。ですから、「スポーツ・文化」にも学びもあるかもしれないです。

「子ども・子育て」のところにもあるかもしれません。そこは、柔軟にお考えいただいて、幅広く、関連性を持った議論をしていただいたほうがよろしいのかなと思っています。

○部会長 よろしいですか。どうぞ。

○委員 まず、5回開催に関しましては、私も賛成です。一つ一つに丁寧に向き合えたらなと思っていたので、ちょうどよかったです。ありがとうございます。

分野別審議の割当てに関してですけれども、これは皆さんにお伺いしたいなと思っているのが、「文化・スポーツ」は、何かくくりやすいくくり方だなと思うんですけれども、「文化」は「文化」、「スポーツ」は「スポーツ」で、ものすごく深い話になるので、果たしてこのくくり方でいいのかは、皆さんにもお伺いしたいと思います。

逆に、親和性という意味では、子ども・子育て、学びというところは被る部分があるので、一つにしてしまって、「文化・スポーツ」、「子ども・子育て・学び」という形もあるのかな、なくはないのかなと思ったので、皆さんのお話を伺いたいなと思ったので。

○委員 要するに、こういうのはジャンル分けできる話じゃないので、取りあえず決めて

において、そこから面白い方向に脱線していけばいいんじゃないですか。文化なんて、どこでもこじつけられる。そんなにかっちり決めることないと、僕は思いますけども。ただ、頭でテーマを決めておかないと進まないから、一応掲げておくことは重要だと思いますけどね。

○子ども家庭部長 委員のご意見は、区としても、どう分けるか、どれがいいと、なかなか言えないと思っています。ただ、今、他の委員がおっしゃっていただいたように、切り口としてどこから入るかということなので、その入り口をどうするかというように捉えていただければと思います。

○委員 私も今の形で何か異議があるわけではなくて、このくくり方をしたときに何か違和感を持つ方がいらっしゃるのかなという問題提起でした。ですので、僕としては、どういう形でくくられても、実際は何も問題ないと思っています。

○部会長 では、どうぞ。

○副部会長 皆さんおっしゃるとおりだと思います。ここで分けられているのは、総合計画、基本計画ということで、将来的には行政の領域に落とし込むこともあって、こうなっているのだと思うんですけれども、前提として、最初から分けるということよりは、少しフリーディスカッションで、ごちゃっとしてもいいかなという感じはしています。

ただ、どこかで共有をしておかなきゃいけないものが、何かあるのではないかなと思うんですね。例えば、人生100年生きなきゃいけないので、子どもたちにどういう力をつけるかという話ですとか、貧困をどうするかですとか、このコロナの問題で、社会システムが変わっていくわけですから、そこをどうするかも含めて、頭の隅っこに置いておきながら、様々な形でご意見を出して、あとは事務局にお任せするという形になるかもしれませんが、最後は切り分けをしていながら深い議論をしていくことになるのではないかと思います。いかがでしょう。

○部会長 先ほどから出ていますように、切り口としてあるけれども、議論はそこにこだわらずに、いろんな発想があって、話題がどんどん展開していく。その中で、事務局は大変になりますけれども、本当にフリーディスカッションのような議論の中で、落とし込みを事務局が整理しながらまとめていくことにはなりますが、我々は切り口として、一回一回、その中で、自分の関心領域があれば、活発なご意見を頂いていく。いろんなご意見を頂くというところが、まさに主だと思いますので、そこに縛られることなく、皆さんの思ったところを話題として、切り口としてはそれぞれの回にテーマを置いているという位置づけ

でよろしいでしょうか。

(了承)

○部会長 ありがとうございます。

では、そのような進め方をさせていただいて、議論で十分にできなかった、言えなかったことが会議終了後あった場合には、様式3を書いていただいて事務局に提出していただいて、不完全燃焼にならないように、言えなかったときには様式で出していただくということで、時間的な制限がある中ではやり取りさせていただくということで進めさせていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

それでは、次の議事の二つ目、部会審議のポイントについてです。

各委員から提出された、部会で議論したいことについては、資料26にまとめられています。これも参考に見ていただきつつ、各委員が考える審議のポイントについて、意見交換をしていきたいと思います。

それでは、審議のテーマの順に従って進めていきたいと思います。時間の目安は、各テーマでおおむね20分程度ということをお願いしたいと思います。

では、各委員の皆様から、まずは「子ども・子育て」を切り口にしてご意見があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 次回につながるような、どういう議論をしていきたいというようなお話をすればいいんですか。

○部会長 まず、皆さんから、こうやって出して、箇条書きになっていますから、それぞれの委員が出されたテーマについて、ここに補足説明をしていただくなりして、こんなようなことを考えて、先ほど人生100年云々というようなのがありましたから、先生から切り口として言っていただいて、そのご発言からいろいろと広がっていければいいかなと思いますけれども。

○副部会長 はい。では、私から。

人生100年と出したんですけれども、死亡最頻値年齢というんですが、一番たくさん亡くなる年齢って、男性87で、女性が93なんです。人生100年生きなきゃいけない時代になったということで、しかも、今年、中学校1年生の子ども予測平均寿命って107歳ですから。もう、来世紀の話もしなきゃいけなくなってくる時代において、子どもというのはどう位置づけられるかという議論をしなくてはいけないのではないかなと思うんです。

特に、先ほどの人口構造を見ましても、杉並ってまだ若い区なんですけれども、やはり

これから、今、中堅層の方々はどんどん長寿化していく。子どもがどんどん減っていますので、その中で子どもたちがどういう人生を歩むのかといったことも、私たち自身が少し考えながら、責任を取らなきゃいけない時代に入ってしまったんじゃないかなというのがあります。

それからもう一つが、これはさっきの議論にあった学びとも関わってくるんですが、まず、私は国の中教審にも関わっていますが、今年から学習指導要領が改訂になって、いろいろ批判はあるんですが、一番大きな見方というのは何かというと、ある意味で、学校で知識を伝えていくということで完結しないというのが前提で作られているんですね。

簡単に言えば、人生100年生き抜くために学び続けていくための基礎を作りたいということになっているので、その意味では、学校で教育課程は終わらないというのが前提で作られて、そう言い切っています。ですから、学校では、授業では教育は完結をしない。生涯学び続ける力の基礎を作るのが学校なのだという考え方で作られています。

そこで重要視されているのが、言語活動と体験活動なんですね。知識を覚えるのではなくて、探求することを前提で活動してください、と。ですから、先生方の教え方も、教える先生から、寄り添って探求する先生に変わってください、そのために地域社会は子どもたちに体験活動の場所を十分に備えてくださいということになっています。

そこで、例えば保護者や地域の方々はどう学校に関わるかではなくて、どう子どもに関わるかという議論にする、生き抜くためにどうするかという議論もしなきゃいけないのと、さらに今、GIGAスクールで、1人に今年中に全部タブレットを配ることになっている。これをどう活用するかで、学校現場は大混乱だと思うんですね。いわゆる個別化の方向に動かさなきゃいけないようになってきているのに、日本は集団化にまた戻そうとしているところがあるので、それをどう考えるか。

簡単に言えば、個別化というのは多様化、多元化ですので、それと、全体最適といいますが、個別で最適化していくのと同時に、新しい価値をお互いに対話的に学んで作り合っていくという関係にどう入るかということが問われているんですね。

そうしたことを通して、実は、貧困の子どもたちも、自らがそこから抜け出そうとする力をつけてもらわないと難しいんじゃないかと。お金を回すことは可能なんだけれども、回すだけではなくて、自分から境遇を変えたいとか、自分からこうしたいと思ってもらわなきゃいけないんじゃないかということで、学んで生きる力をつけてもらうということが前提になっているんですね。大きな転換になりますので、なかなか思うようにいかないか

もしもかもしれませんが、少なくとも10年から20年をかけて実施していくという方向性を示されてきています。

その意味では、大きな社会の転換期になってきていて、本来であれば、もう30年ぐらい前からこうなることは予測されていたので、切り替えていなきゃいけなかったのが何かずる来てしまったということがあるんですが、もう引き返せないだろうという議論になっています。その中で100年どう生き抜くかといったことを前提にしながら、さらに言えば、高齢の方々がどんどん増えていく社会に子どもたちは生きなきゃいけない。

世界で統計を取ると日本が一番ひどいんですが、若者が高齢者を嫌いなんですよね。世界で一番嫌いな国なんですよ。

○委員 そういうアンケートがあるんですか。

○副部長 あります。そういう調査があります。

○委員 最低だな、それ。

○副部長 それはちょっとまずいんじゃないかという部分もありますので。

○委員 すごいな。

○副部長 もう少し共生する社会を、一緒に共に生きていく社会をつくるにはどうしたらいいかという議論をしなきゃいけなくなっている。子どものときに様々な問題が集中してきているという面があるので、そこをどう考えるか、杉並区としてどう考えるかということも議論しなければいけないかなというふうに思っています。

大きな話になってしまいましたけれども、大きな社会背景としてはそんな感じで、政策的にはそのように動いているんですね。

その中で、今、地域社会が、私たちは「草刈り場」と呼んでいますけれども、そうってきていて、文科省は、地域学校協働活動で学校をベースにしながら地域を巻き込んで、地域で子どもを育てる仕組みをつくってと言っています。それから、厚労省は、地域包括ケアという言い方から、今、地域共生社会づくりと言いはじめていて、簡単に言いますと、学びと出会いのプラットフォームを厚労省がつくると言いはじめています。

それから、国交省は、地域防災のために学びのプラットフォームをつくると言いはじめています。それから、まち・ひと・しごとは、小さな社会、拠点をつくるというので、これは経済拠点ですけども、そのときの基本は住民の学びだと言いはじめています。

実は、学びとか教育や学習が教育委員会マターではなくなりつつあるという問題もあるものですから、そのあたりも含めて、子どもたちってどういう社会に生きるのかといった

ことを考えなきゃいけないくなっている面もあります。

最初からこんなことを言っていていいかどうかよく分からないんですけども、少しそのあたりも背景に置いていただいた上で、子どもたちをどうする、子どもたちにどういう人生を送ってもらいたいと思っているのかといったことから入るお話をさせていただければなどという感じがするんですけども、いかがでしょう。

○部会長 ありがとうございます。

切り口としては、子ども・子育てといったところでやり取りします。本当に学びは、もう全てに関わってくるころ。大きな流れが今説明されてきましたので、今のお話でいろいろ触発された方々も多々いるのではないかなと思いますので、何かご意見等があれば、ご発言いただければと思います。どうぞ。

○委員 話のレベルがどれぐらいのものなのか分からないんですけども、思いっきり下げるんじゃないかなという意識でお話しさせていただくと、私、杉並区立中瀬中学校でキャリア教育を3年間担当させていただいているんですけども、このキャリア教育って、地域性にすごく寄っちゃうんですね。職場体験のときに、その中学校を中心とした近所に声をかけに行って、オーケーをもらって、そこに派遣していくという形なんですけども、それだと、この中学校だと保育園が多いからそこに行きやすいからとか、また別のところでは、コンビニが多いからコンビニとか、そういう地域格差が生まれているなというのは、中瀬以外のところも担当させていただいたときに気づいて。もちろん、まちに根づいたキャリア教育もあるのかもしれないんですけども、もう少し幅広くキャリアというものを捉えたときに、様々な職業体験ができるような仕組みはあったほうがいいのかというのは思いました。という感じでいいんですか？

○部会長 思ったことをまずは発言していただいて、そこから議論ができればいいかなと思いますので、今日、第1回目ですからね。

○委員 分かりました。

○部会長 皆さんが何を考えているか分かっていないので。では、どうぞ。

○委員 子どもがいっぱいいたんですけども、学校で一番変だなと、子どもも大きくなってから言っていたのは、同い年の連中とずっと過ごさなきゃいけない。もちろん、クラスの中で、少ない人数の中でやって、結局はいじめだの何だのというのが出てくるわけですけども、それだけの問題じゃなくて、今言った、子どもが高齢者を嫌いだというのは、視野が狭いというだけのことだと思うんですね、年齢的なことに関して。

その視野の狭さというのがどこから来ているかといったら、同じ年の連中とずっと付き合っただけで、ほとんどそれだけでずっと行くということに、やっぱり一番問題があるんじゃないかなと思っていますよ。

ただ、どうしたらいいのかということでは、僕は、ちょこちょこやることではあんまり問題は解決しないという考え方の持ち主で、これを言ったらまた大変なことになるでしょうけれども、学校に行くのは週3日ぐらいでいいんじゃないかと。3日か4日ぐらいで、あとの3日間は、別な体系の体験学習という話をしていましたけれども、しかも年齢や構成人員もばらばらで、いろいろ都合があると思うのでどういう形のばらばらにしたらいいのかというのは分かりませんが、そういうような自由な教育をしている私立の学校が結構あるんですよ。でも、それは、確かに自由過ぎて、実際の社会と隔離し過ぎてしまうということもありながら、その辺をもうちょっと取り入れて、公立の学校の中でも全く今までとは違う形態みたいなのをやってみると、それこそ生きる力に近いようなものができていくのではないかなと思っています。すぐできることではないだろうとは、分かりますけれども。

○部会長 ありがとうございます。この基本構想は、遠い将来を見据えてやっていくということですからね。

○委員 そうなんだ。いいんであればね。

○委員 僕ぐらいの年齢というんですかね、昭和31年生まれですけど、こういう話題になると、昔は路地裏にガキ大将がいて、そこに子どもの縦社会があったとかね。そういう話をしたくなる。駄菓子屋がたまり場だったとか、学校以外では。そういう話をするのは好きなんですけど、見えないところで違うコミュニケーションがいっぱい生まれていますよね。例えば、今のTVゲームなんかで、「あつ森」でもいいですけど、そこでのサークルみたいなのが出来上がっている。一概に、駄菓子屋とかそういう場所にたまれない今の子どもが不幸かどうかとは何か言えないようなところもあって。だから、インターネットであるとか、インドア、パソコンの中でそういうサークルを持っている世代の意見なんかも聞きたいテーマだなと感じますね、こういう話というのはね。実際、僕より下の方でやられている方はいないの、そういうコミュニケーションを若い世代で取っているとか。

○委員 今、異世代間の交流ということが出てきたと思うので話すと、僕が思うのは、僕も、ついこの間まで小学生だったので思うのは、確かに同世代のコミュニティの中で完結してしまっている部分がやっぱりあるのかなと思って。

そこで僕が思うのは、卒業生との交流の場があってもいいのかなと。例えば小学校でいったら、その小学校を卒業した中学生、高校生、大学生とか、少し上のお兄さん、お姉さんみたいな存在と一緒にあって、彼らが今こういうことを勉強しているんだよとか、さらにその上の社会人で、自分はこのことに興味を持ったから今こういう職業を、こういう仕事をやっているんだよというのが、そういったつながりを持てる機会があれば、本当に視野が広がるきっかけになるのかなと思って。

キャリア教育という面で言うと、僕がこの基本構想で違和感を少し感じたのが、数値目標として「将来の夢・目標が定まっている子ども」というのがあるんですね。それっていうのは、視野を広げるというよりむしろ狭めることになってしまうのかなと思って。僕が子ども時代——今もほぼ子どもみたいなものですけど、一番嫌いな、大人からされる質問……。

○委員 今お幾つぐらいなんですか。

○委員 今、大学1年で、18ですね。

一番嫌いと言っちゃなんですけど、嫌な質問だったのが、「将来、何の仕事に就きたいの？」という質問なんですよ。大体、初対面の大人に会うと、そういうことを言われるんですけど、職業として何って、そんな、子どものうちから決める必要あるのかなと。

それよりもむしろ、例えば志じゃないですけど、もっと大きな目標として、職業に縛られるんじゃないかと、そういうものがあるのかなというのはずっと思っていて。何かそういうことを考えると、何か一つの職業に絞きなさいというようなキャリア教育よりも、いろんな、将来の働き方とか進路があるんだよということが分かるような機会が提供できればいいのかなと思っています。

○委員 やっぱり高齢者が嫌いなんですか。

○委員 いやいや、全然そんなことないです。

○委員 今のはそういう感じだった。

○委員 僕は、祖母と同居していたんで、むしろ高齢者と付き合う機会というのは本当に多くて。もちろん介護の問題もそうですし、あとは、地域のお祭りとか自治会とかに出るような場面というのは結構あって、そういうところに行くと思うのは、本当におじいさん、おばあさんばかりだなと。それこそ、この部会のテーマからは外れちゃいますけど、地域のコミュニティの軽薄化というのは本当に感じていて、僕の親世代がそのコミュニティに行くのと若者なんです。50代の父親でさえ若者として扱われてしまうようなそういう現

状というのは、どうなのかなと思って、やっぱり地域の中で、いろんな、子どもからおじいさん、おばあさんまで含めた交流が持てればいいのかなのというの思います。

○委員 まあ、その年齢の高い人たちが偉そうになる時代というのはだんだん変わっていきくんじゃないかなとは思いますがね。僕らヒッピー世代なんで、もう……。

○委員 僕のほうが、大分、下ですよ。

○委員 ああ、同じだと思ってた。でも、ヒッピー世代になってくると、もう関係ないんだよね。自分が幾つかということのを忘れてしまうタイプの連中。

○委員 ヒッピー世代は団塊の世代ですか。

○委員 僕は団塊には入っていないぐらいなんですよ。

○委員 団塊は、数が多かったというのはありますよね、一つ。

○委員 うん。あと、その辺は全員がそうかというところではないんだけど、ただ、そういう人間の種類は大分変わっていくだろうなというのがありますよね。

だって、威張られちゃったら、もう終わりなのでね。僕は、威張るやつは嫌いだとか言っているうちに、威張っている人のほうが年下になってきちゃって、よく分からない状況にはなっていますけど。年齢だけの問題ではなくて、人の資質の問題だろうという感じはしますよね。

どちらにしろ、下から上までがみんな同じような感じで、話もできて、考えて、コミュニケーションを取れるというのが、人間100年時代というのであれば、それが一番理想ではないかなと思いますね。そこへ向かうために何を提示したらいいんだということなんじゃないかなという感じがしますけど。

○委員 実際子どもを育てて、今、大学2年生ですけど、子どもたちは杉並区で育てましたが、難しいなとすごく思うんですね。なぜかという、知識的なものを彼女たちはすぐに調べてしまって、娘たちのほうがよく知っていたりする。

それがおそらく学校でも起こっているから、娘たちの頃は小学校のときにインターネットがあったわけではないんですけど、今はもうあるわけで、小学校の先生が教えようとしても、子どもたちのほうが、すぐに調べてよく分かっていたり知っていたりするんで、おそらく教育というものの形が変わってきていると思うんです。

だから、そういった中で、やっぱり学校の先生、小学校の先生ですね。私たちは、1997年から2003年、5年間、2009年から2014年、5年間、10年間、出産も向こうでしているんですけど、ロンドンで暮らしていて、日本の教育と、ロンドンの教育と一番の違いは、小

学校の先生の権威かなと思っています。小学校の先生は、ものすごく偉くて、もちろん親たちも従わないとといけないし、子どもたちも、ミスター、ミスという形で、「様」、「様」みたいな、先生の代わりなんですけれど、すごく権威が高いんですよね。

それに比べて、日本の小学校、桃井第二小学校に1年生、2年生と通わせましたが、親のほうが偉いですよ。PTAでもやっぱり親がものすごく強いし、先生は、若い先生は特にノイローゼになって来なくなったりとか、何人もいました。学級崩壊します。何年もあり、何組も見ました。そういった形で教育そのものが難しくなっている中で、学校の先生、特に小学校の先生ですね、小学校の先生の権威というのがもう全然崩れていて、だから学校崩壊にもなるし、いじめも起こるし、不登校みたいなものもすごく増えている。

それは、杉並区だけの問題ではないのだと思うんですけど、目に見える形で起こって、私も見てきました。子どもたちの同級生が来なくなったりします。

理由としては、学校の先生に対する社会的な立場が低いんだなと感じました。ロンドンと比べてですけど。

もう一つは、子どもたちがいろんな形で自分たちに何かを教えるとか、何か決めるとか、こうやって将来こうなったらいいんだと指導するのは、すごく何か違っていて、100年も生きる中で、すごく変化していくわけだから、子どもたちが選んでいかなきゃいけないんですよ。選んでいく自由があっていいわけで。例えば、本は3冊しか借りられませんとか。でも、本をもっと読みたい子っていますよね。一日5冊ぐらい読んでしまう子だっているわけで、その子には5冊貸してもいいんじゃないかとか。小さなことなんですけれど、そういう柔軟性が日本の学校には全然ないんですね。

あと、ホームスクーリングみたいな形で、不登校になったときに、「あ、この子は駄目な子」みたいなレッテルしかなくて、選択肢として、高学歴のご両親がいてお母さんがいられるのだとすれば、じゃあうちの子はホームスクーリングを選びます、といった選択肢もあってもいいんじゃないかなと思うんですね。それも日本にはおそらくないシステムで、イギリスだとすごく柔軟にあって、音楽家になる子とか絵が好きな子とか、みんなホームスクーリングをします。その代わり、土曜日に特別学校みたいなものがあるって、国がやっているアカデミーを、ロイヤルアカデミー・ミュージックとかアートとかが子ども向けの主催をやっている、そこだけは行く。レベル別のクラスになるから、年齢も関係なく自分のレベルに合った技術の中で、子どもたち同士で学べたりするわけで、それはスポーツでも、アート、文化でも同じだと思うんですけど、そういった柔軟な形。だから、大人が

決めるとか行政が決めるとかというよりも、子どもから出てきたものをどう伸ばすのかという発想が必要なんじゃないかなと思います。

○部会長 子どもの権利条約というのが、日本が1994年に批准したんですね。日本は、158番目ですから。

○委員 低いんですね。

○部会長 日本が批准したのが、1989年に国連で採択された5年後ですから。子どもの権利というものに対しては、すごく後ろ向き。

○委員 低い。

○部会長 「権利」と言っただけで、もう、駄目だという。

○委員 そうですね。

○部会長 「何が子どもに権利だ。」というね。

だけれども、その基本は、子どもの最善の利益を保障することなんですよ。

では、子どもの最善の利益の保障とは何かといたら、子どもの声に耳を傾ける社会。耳を傾ける大人。こういうことが、子どもの最善の利益につながっていく。これまでは、子どもたちは、「おまえたちは未熟だから意見を言うな」、「大人が決めるからいいんだよ」というようなことで、一切、声を聞いて来なかった。ある人は、「子どもの言いなりになることか」と言うが、いや、そういうことじゃないんだと。子どもたちがやってきたことで、違っていれば、それを説明して、子どもたちが納得する。そういうやり取りが必要で、言われたことを全て鵜呑みにするのが子どもの最善の利益ではない。そういうやり取りもこれまではしてこなかった。このやり取りがすごく大事になっていくのだと。

○委員 そして、子どもが選んでいく。

○部会長 そうです。

○委員 こうなりたい。ああ、じゃあ、こういうふうに言っていた。だから、こうしたいという形、それが自然。

○部会長 そう。だから、まずは子どもの声を聞く地域社会になっていかないといけないんじゃないかなと。

○委員 そうですね。例えば給食費にしたって、収入の低い家のお子さんは払わないということになっているんですよ。全員が給食費を払わなきゃいけないというわけでもないし、年収が低い所得の低い家庭の人は、給食費を払わなくてもいいんです。

そういう柔軟な対応は、日本だと、「給食費は同じように払わないと不公平だ」、とい

うことになったりするんですけど、ひとり親の家庭で育っているお子さんや、家計が苦しいのであれば、それは社会がサポートする。子どもには罪がないので、同じような権利がもらえるように、社会がサポートする。そういった形で子どもを経済的に支えながら、こういうふうになりたい、こんなふうになっていきたいという子どもの意思を芽吹かせるチャンスを与えることができれば、それが行政の最も大切な役割ではないでしょうかね。

○委員 払えない人に補助金は出ないんですか。

○委員 就学援助というので、すごく厳しい基準ではあるんですけども、生活保護の少し上ぐらいの収入の人たちだったら、就学、学校に行くときの費用を援助しますというので、給食費を実費で払うことから、入学準備金やそういった制度もあるんですけども。

○委員 そうですか。

○委員 僕から見ると、まだまだ知られていない制度なのと、それを受けるといのがばれたときに、すごく恥ずかしいと思っちゃうんですよね。

これは生活保護制度も一緒に、国のお世話になっているあいつみたいな、後ろ指を指されるのではないかと。実際に指す人たちがいるので、そうなっちゃうんですけども。制度を知らない人と、知っていても私たちは貧困家庭じゃないからといって、その制度に入っているはずの人たちも受けていないというのがある。

○委員 今回のコロナで、給付金だの何だのをいろんな人たちが調べるきっかけになっている。コロナ後の社会という意味では、だんだんとそういうものがもっと簡単になってね。今まではちょっと面倒ですよ。何回も何回も行かないとできないとかで、何か諦める、嫌になっちゃうとかで、申請できないということになったんでしょうけれども。その辺はだんだん簡素化されていくんじゃないんですかね。

こういうときは助けてもらう、こういうときには逆に助けるみたいな社会になっていけばいいんだろうなということなんじゃないですか。もう、入り口が見えているような気はするんですけどね。

○委員 他人の目を気にするというのは、やっぱり国民性というのかな。その辺は、イギリスの方とは大分違うのかなと思うんです。そこから変えるのは大変ですからね。

○委員 イギリスは上下がはっきりしているんで、生まれたときから、階級がある国だよ。そういう意味では、保護を受ける、この人たちは保護を受けるんだというふうになって、この何十年も生きてきているから、割とそういうことが起こっているんだと思うんですよ。だから、日本みたいに戦争が終わった途端に、何か全部が中流としちゃった国でそ

ういう制度を柔軟に取り入れていくのが難しいのは、それは仕方がなかったことなのではないかなとは思いますが。でも、コロナ後は結構いくんじゃないかなと。役所はものすごく忙しくなるでしょうけれども、あらゆることで。

○委員 給食費の給付金を受ける人の数が多くなればいいですよ、日本人。

○委員 いや、多いんじゃないの。今は。

○委員 人目というのを気にしているのが問題だから。

○委員 今、本当は多いんでしょ。7人に1人が、というぐらいだから。

○委員 そのときに、あの人も受けているからというほうが、先に来ちゃうんですか。

○委員 そうか。

○委員 7人に1人の割合で就学援助が受けられているのかというと、そうではないんじゃないのかな。

○委員 援助は受けられていないけれども、そういう立場にいる人が7人に1人と。

○委員 その立場にいる人たちが、本当に申請をする、もしくはその制度を知るところまでは、まだまだこれからの課題だと思います。

○委員 忙しいのに、申請に時間がかかると、やっぱり諦めるしかないということになっちゃうということ。

○委員 コロナになって、国も東京都も杉並区も、すごく努力されて様々な支援制度をつくられているんですけども、まだまだすごく手間がかかる…。

○委員 手間がかかるものとかからないものとの差ははっきりしていて、大変だよね。

○委員 その使いやすさというのは行政がこれからいろいろ研究されて、オンライン入力ができるようになっていくのだと思うんですけども、僕らが、もっと使いやすくしてほしい、こういうところが使いづらいんだというのをきちんと知らせていかないと、どう変えていいのかが分からないんじゃないのかなと。

子どもだけじゃなくて、貧困については、「生活保護」という言葉が、日本特有の制度名称なんですね。あまり詳しくは知らないんですけども、海外、ヨーロッパとかだと……。

○委員 利益といいます。ベネフィッツという。

○委員 基本的には権利ですよ。仕事を失職したとか、何か勉強するために、だから家庭のほかの人たちは働いていても、個人に対して、新しく就職するまで、収入が決まるまでは、きちっと給付はある。日本は、まるで働かない人がそれを受け取るみたいな、働けない人を保護するみたいなイメージになっているのがすごく怖いと思うんですよ。

そういう生活保護のイメージがあるから、それと連動するような就学援助などの様々な制度を使うことに後ろめたさを感じざるを得ないという。昔、子どもを学校に通わせて就学援助を受けていたという親御さんから、就学援助のお知らせの封筒を友達の前で私だけ渡された子どもが言っていたと。封筒に入っているので何のお知らせか分からないんですけども、周りの子たちは何のお手紙かというのは大体想像がついちゃうんじゃないかと。

そういうふうに見られるのがすごく嫌だったということ子どもが言っていた、というお話を聞いたことがあります。誰もがそんな嫌な思いをして制度を使うのではなくて、その制度を使って当たり前なんだよという、そういう社会にしていきたいですね、貧困問題については。

○委員 また全然違う切り口になっちゃうんですけど、さきほどの委員のお話につながるころかな。そもそも学校って今後どういう場所になっていくんだろうというのは、コロナ禍において、また考えさせるきっかけになったと思ったんですよね。

面白い事例を出している中野区にある新渡戸文化学園というのは、学校というのは地域の公共財という前提の下に、いろいろ改築をしているんですよね。図書館も、地域の人たちが使う前提で考えたときに、回覧をどうしようとか、置く書物をどうしようとか、そういう形で考えていて、それは言葉で表現すると、「学校開放」という言葉とは真逆の考え方なんですよね。学校はもともと開かれているものなんだからという前提が変わって、その考え方ってすごく面白いなと思っていて。

一方、杉並区は、コミュニティスクールの導入がほぼ完成するに当たって、地域は学校がつくって、学校は地域をつくるという、ソフトの部分に関しては仕組みが出来上がっているんで、ハードとして学校をどう捉えていくかというのは、何か一つ考えても面白いところなのかなと思いました。

○子ども家庭部長 議論が大分白熱しているところで申し訳ありません。子ども・子育てと、学びも随分ご意見を頂いたんですが……

○部会長 スポーツとか。

○子ども家庭部長 文化とスポーツについても、少しご議論いただければと。

○部会長 どこで仕切ろうかとなと思いつつながら。スポーツや文化というところで少し議論しておかないと、あと1時間弱になってしまったので。まだご発言されていない委員がいっぱいいますので、スポーツ・文化とか、何かご意見があれば。

委員、何かありますか。議論の感想でも構わないですし、スポーツをやられて、学校開

放があったりとか、杉並の子どもたちに聞くとボール投げとかをやりたいけど、公園に行ったら、小さいお子さんを抱えたお母さんからボール投げをやっちゃ駄目だとか言われたり、じゃあ僕たちはどこでボールを投げたらいいんだ、というね。

○委員 では一つ。

○部会長 どうぞ。

○委員 子どもの基礎体力というか、先ほど人生100年という話がありましたけども、今、スポーツというと、いわゆる体育からスポーツに変わり始めていて、生涯スポーツという言葉が、結構定着し始めてきている。幼児期から、亡くなる直前まで運動できればいいよねというのが一番なんですけど。私はテニスが専門なんですけども、我々、体育協会が、一番懸念しているのは、幼児期の運動をどれだけやるかといったところが、一番の人生100年の基本になると思っているのですけども、そこが徐々に崩れている。

先ほど言ったように、そうすると遊び場がなくなったとかの話に、すぐなるんですけども、逆に、遊び場がない中で、どうしたらその基礎をつくれるのかといったところを考えていかなきゃいけない、仕組みとして考えていかなきゃいけないんじゃないかなと。

よく、幼稚園から小学校低学年が一番重要なポイントだと言われてはいますが、そこでいかにどれだけ遊ぶか、と思うんです。そうすると、大人はすぐ、もう原っぱがないよ云々と言って、ないことばかりしか言わなくて。ない前提だったら、ない中でどういうふうにできるかを考えていかないといけないし、それは杉並だったらできるのかな、みんな考えればできるかな、と僕自身はちょっと思っているところがあって。

それと、小学校、中学校、高校、部活の問題も、多分、相当いろいろあります。

今、一番大きいのは、青年になった若い人たちの運動、スポーツ離れというのはものすごく顕著で、特に若い女性のスポーツ離れというのは、どこの競技も大変な話になってきている。

そういった意味で、全体的に、いわゆる体を動かすスポーツということに対して、両極端になってきている。やる人は思い切りやるけれども、やらない人は本当にやらない。

どんどん二極化している中で、どのように生涯スポーツという観点でいくのか。

それから、やはりスポーツの力というのは、僕はすごいと思っているので、文化を含めてその辺をどう融合していくのかを考えていきたいなと思います。

○部会長 ありがとうございます。はい。どうぞ。

○委員 僕の義理の弟が神明中学で神明クラブというのを立ち上げてやっていた人で、亡

くなっちゃったんですけども、それを、今、甥っ子が続けてやっているんです。

学校のグラウンド自体、または学校の施設自体を地域のクラブとして使えないかということ始めて、ただ、有料でやるわけにいかないの、じゃあお礼をどうしたらいいんだろうというので、何か草むしりか何かやっているらしいんですよ。1か月に一度、みんなが集まって草むしりをして、それをボランティアということで、何か対価にしてやっているというんです。

草むしりはあんまりいいアイデアじゃないなと思いつつ、だけど、やっぱりそういう形で開放——開放というのは遅いというような話も今ありましたけど、そうやって学校を使っていくのは、危険が伴うわけですよ。勝手に使われちゃう。または危ない人がやってくるか、いろいろあると思うので、ちゃんとシステム化しなきゃいけないんだろうなとは思いますが、でも、ポテンシャルとしてはものすごくあるものだと思うんですよ。

だから、学校の卒業生と交流云々ということも全部含めて、スポーツを通してやるのが一番簡単なことだし、それもどんどんやっていけるような地域になったとしたら、ものすごいなとは考えています。神明クラブのテーマソングも書いたんですけどね。

○委員 もう一点。そういう意味で、ソフト、いわゆるスポーツという切り口かどうか分からないですけど、もう一つ課題になっているのが、指導者——指導者と言っていいかな、面倒を見る人。コーディネーター役がないというか、コーディネーター役ができる資質の人が少ないと言ったほうがいいのかも分からないんですけど。

○委員 そうですね。だから、それがやばい人だと、危険ということですよ。

○委員 若い人でもいいんです。そういうことができる資質の人をどういうふうに育てていくのが一番ポイントになるし、今、競技団体を含めて一番の課題なのは、面倒を見る人がどんどん高齢化して、いわゆる40代、50代、少々時間が取れる、自分の時間が取れるような世代の人たちが少なくなっている。これはもう、他の区もみんなそうなんですけど、同じように年代が上に上がって行って、その下の年代がなかなかいない。どういうふうにこれを育成していくのが、スポーツボランティアという言い方がいいのか分かりませんが、その辺も一つ大きな課題になっています。

○委員 それは、職業にしちゃいけないんですか。要するに、NPOみたいな形で、それをちゃんと仕事にしてやるという形にしないと。

○委員 今、区でも一生懸命プロを入れたり、それはそれとしてあるんですけども、そういう人たちがいても、もう少し手足になる人たちがいるじゃないですか。

○委員 コーディネーター自体がプロになってしまえばいいんじゃないかと思うんだけど。

○委員 そうそう。

○委員 そういうのって、近所のおじさんがやらなきゃいけないという伝統があるんで。

○委員 そうなると、最悪な形になってくる。

○委員 ちゃんとそういうことを勉強した方、または、そういうことをやってこられた人がコーディネーターになってやっていくというのはどうなんですか。そして、どこかからか、ちゃんと資金が出るという。

○委員 そうですね。その議論って、杉並ではまだ、どこまでできているか僕は知らないですけども、それは、一つの姿という形で言われているし、僕もそれがいいかなと。

その核になるのが、地域の学校に、という形がそういう意味では施設もある程度使えるし。小学校、中学校レベルでいくと、一番地域に密着できるかなというところはあります。

○委員 では、よろしいですか。

○部会長 どうぞ。

○委員 文化・スポーツや子育てとか全部関わってきて、それは学校とも関わると思うんですけども、地域で、特に子どもが関わるスポーツの場だったり、あと、町会・自治会としては、イベント、お祭りとか、いろいろあると思うんですけども、私を感じるのが、参加する子どもって、どういう場所でどういうのをやっても、大体同じような子が来るんですよ。それって、特に未就学だったり、小学校低学年ぐらいだと、学校でやる場合はまた別なんでしょうけれども、結局は、先ほど最初に出た体験活動に、親がある程度熱心かどうかで、それが子どもの体験活動につながってくる。

大人も結構似ているところがあると思っていまして、先ほど言った学校開放なんかで団体で活動をやっている人たちは、イベントの場でも、顔を見るんですよ。

やっぱりそうなると、子育てという意味で、親がそんなに熱心でなくても、子どもの意思でそういう体験活動が行きやすくなる場所というと、特に「つ歳」※ですね。小学校の低・中学年までで言えば、小学校でやっているのだったら、多分、自分一人の力で行けると思うのですよね。また、次にそういう年配の人なんかも含めても、学校は、敷地も含めて、あれだけのキャパシティーを持っているので、まだ生かせる余地はあると思っています。

教育委員会は嫌がる面もあると思うんですけども、今でも既にやってはいるんですけども、こうしたこともあって、5ページの一番下の「学校施設等のさらなる有効活用」と

というのは、改めて挙げさせてもらったんですけども、そうした中で実際、今年度から一応、教育委員会で検討は始めていますよね。学校の教育課程が終わった後、放課後以降や土日だと思うんですけども、それぞれ地域の中にあれだけの存在感を持っている建物、あと校庭があって、もちろん安全面も確保した上でしょうけれども、それをいかにより使い倒せるような仕組みをつくっていけるか。そういうことができれば、今もスポーツでも使っていますけれども、文化活動の場としての活用というのは、正直まだかな、とは思いますが。合唱サークルでは使っていたりはするんですけども。

もう一つは、今までの学校の教育活動のお手伝いみたいなところは、一応、有償ボランティアという形は取られていますけれども、あくまでもボランティアという位置づけが強いと思います。今、無償ではない仕組みも十分ありますけれども。

先ほどからも出ているように、その仕組みでいけるのは、あと10年ぐらいが限度なのではという気はしております。先ほど来、人生100年時代と出ていますが、ここでもう仕事は引退ということがしづらくなってきたときに、お小遣い程度のお金がもらえるんだったら十分だよという人たちだけで、この先、回していけるのかどうか。

歩いて行ける地域の中で言えば、ほとんどの方にとっては小学校なり中学校というのが一番大きなシンボルだと思いますので、あまり仕組みにこだわっても窮屈になる面はあると思うんですけども、世代を問わずに、子ども・子育て、学び、そして文化・スポーツですよね。そういったところもひっくるめて、よりうまく、何かいい形が考えられたらいいなというふうに思っています。

※ 数をかぞえるとき、「ひとつ」から数えて「このつ」までは「つ」がつくが、

10から「つ」がつかなくなることから、9歳までという意味。

○委員 スポーツって何なんだろうなというところについて、今は、もっと細分化されている気がするんですよね。例えば、競技としてのスポーツなのか、体の健康のためのランニングは、スポーツなのかとか。フレイル予防、虚弱予防であって介護予防のための運動というのは何なのか。多分この場面で語られるスポーツって、広く全体のことを捉えようと思うんですけど、一つ一つ、目的と対象に合わせて、それぞれに対して何ができるか、必要なかというのは話してみたいなと思って、聞いてみました。

○委員 e ゲームなんて、正式のなものね。

○委員 e スポーツ。本当に、いいスポーツなのかな。

○委員 ただ、それは、基準、要するに手先としても、任天堂のWiiでも、本当に、す

ごく鍛えられるのがあるじゃないですか。最終的には学校にそういう装置が入って、指導者がAIになっていくような話になるかなと思うんですよね。その、有能な指導者が、システムをインプットしてさ。

○委員 科学が、AIになっちゃうんだ。

○委員 将来的にはそういうふうに。今、昔みたいに外で草野球やるよりは、やっぱりテレビゲームの刺激のほうが強いしね。その年代の子どもだったら、僕は、絶対、ずっとテレビゲームをやっていると思いますよね。

○委員 でも、両方やるやつは両方やるよね。

○委員 うん。ただ、僕らの頃はあんな面白いゲームはなかった。

○委員 なかったからね。最初は夢中になっちゃったから。

○委員 そうそう。

○委員 スポーツの定義も、この二、三年でどんどん変わってきたんで、そういった意味でどういう捉え方をするかで変わるし、どんどんつくっていけばいいかなと思っているんですよね。先ほどの草むしりだって、「草むしりだってスポーツだよ」という言い方ができるじゃないですか。

○委員 あれもスポーツにしちゃうんですか。草むしり、それもすごいな。

音楽なんかは、実際には、プロという形の音楽は本当にすごく小さくて、そこから垣根のない形で、おばあちゃんたちのフラダンスに至るまで、ずっとつながっているものだと思うんですよね。だから、僕は、あんまり区分けをする必要はないと思う。スポーツも同じような形で、本当はもうつながっているんだと思うんですよ。

ただ、みんなが、あまりそういう形で見えていないから、分かりづらいのかもしれないけれども。それで、みんなが発表の場が欲しいんですよ。世界一になる必要は全然ないんですけど、やっぱり発表の場があるのが、ものすごくいいことなんですよ。

だから、スポーツも大会が必要になるというのは、おじいちゃんだろうが、おばあちゃんだろうが、何か欲しいというのは、間違いないことだと思うんですよね。

それを取っちゃって、毎日やればいいのか、健康のためにただ歩いているよというのは、それはまた、つまらないと思うんですよね。だから、スポーツなり文化なり、芸術もそうですけどね。芸術は人と競うものではないとかいろいろあるけど、コンクールがあるじゃないですか。それが拭い去り切れないというのは、それが本質だからだと思うんですよね。やり続けることと、区切りをつけて、発表する機会があることというのは、

両方大事だろうなと思います。

○副部長 よろしいですか。

○部長 はい。どうぞ。

○副部長 部長の分野とも関わってくると思いますけども、今のお話とさっきの議論と関わらせてみると、孤立の問題ですとか、関係をどうするかとか、それからどういうふうに認められるかという、そういう関係をつくるかみたいなことも、とても大事じゃないかなと思うんですね。

私の関係者で、子どもの運動のことをやっている方がいるんですけど、やっぱり、行けといっても行かないですよ。親子関係がとても良好で、行くと褒めてもらえとか認められるとか、楽しいということが分かってくると行くようになって、行き始めていろんな仲間ができてお互いに競ったり、認め合ったりする中で、もっともっと、という行動力が生まれてくるんですよ。そういうことがない中で、行けといっても行かないし、歌を歌えといっても多分歌わないと思うんですよ。

その意味では、やっぱり孤立をしない。今、コロナの関係で若い人がどんどん自殺をしちゃっていますけども、やはり孤立ということが大きな背景にあるんだろうと思いますし、関係性をどうつけるかということもやっぱり大事になってきている。

貧困の問題も、貧困は学校教育を通して再生産されていると言われていて、親が貧困だと、高い学歴がつけられないで子どもが貧困になって、また孫が貧困になると言われているんですね。では、お金をつければいいかという、それだけでは駄目で、学力をつけなきゃいけない。学力をつけるにはどうしたらいいかというので、一時流行ったのが、非認知能力というんですけど、詰め込んでも駄目だから、褒めなさいと言われて、ペーパーテストでは測れない力をつけなきゃいけない。例えば自己肯定感ですとか。そういうことをやろうとしたんですが、うまくいかないんですね。なぜかという、自己肯定感を高めるためには言葉をちゃんと運用できて、自分のことが認識できなければ高まっていかないので、学力が必要なんだ。また、元に戻ってっちゃうんです。

そのときに何が問題かという、基本的には、やる気が起こらないとか頑張ろうと思えないということが大きな問題だと言われはじめていて、そういう意味で、承認関係という関係性の問題なんじゃないかと。そうすると、貧困って、やっぱり関係の貧困なんじゃないか。やる気が起こらないと、スポーツもやらないし、文化のほうにも行けませんし、勉強もしませんということになって、結局、何をやっても駄目だと言って、終わっていつ

しまうことが起こるようになるんですね。そういう関係性を社会でどうつけていくのかと
いったことも基本に考えながら、それぞれの、例えばスポーツ・文化をどうするか、また
は学びをどうするかという議論というのも大事ではないかなと、お話を伺って思いました。

それから、さきほどの学校の話ですけど、最近、私はあちこちで話をされていて、皆さん
から言われるんですよ。「東大生はすごいですね」と言われるんですね。「クイズ王にし
かならないですよ」と言われるんです。クイズ王って、基本的には人工知能でできるこ
となので、簡単に言えば、知識はたくさんあるけれども、使えないですよと、裏で言わ
れているわけですよ。これって、昔の工業社会のときの学校システムのままになってい
るので、みんな一斉に、同じ時間に同じように学校に行って、同じように学ばなきゃいけ
ないし、同じ方向を向いて競争させようとするということが起こっているんです。日本社
会でも、そうじゃなくなってもう30年以上経つんです。ですけど、まだ、そのシステムの
ままになっていてというので、今回、学習指導要領を変えたんですけども、また元に戻そ
うという力が働いているので、なかなか難しいなと思うんですが、やはり学校のあり方そ
のものを変えなければいけないのかなと。

今回、コロナがいい例だったんですが、GIGAスクールで1人1台タブレットをもらっ
たのに、また対面授業に戻して、学校に行ってみんなでやっている。これはやらなくたっ
て同じじゃないかみたいな議論が出ているわけですよ。個別化、多様化ということと、
学年を壊してお互いに教え合っている関係をつくれれば良いと思うんですが、そういうふ
うにいかなくて、また年齢輪切りになっていくというようなことに戻ってってしまうん
で、そのあたりも社会の仕組みを変えなきゃいけないと思いますけど。

○委員 さきほどの、「関係性をつくっていかねばいけない」が、ちょっと分かりに
くかったのは、具体的にはどういうことを指しての関係性という言葉なんですか。

○副部長 なかなか難しいんですけど、例えば、承認関係ですよ。お互いに認め合え
る関係というか。よく例に出すのは、歯磨き。虫歯って生活習慣全般に関わっているので、
歯磨きの訓練だけでも駄目だという議論があるんですね。

○委員 はい。

○副部長 簡単に言うと、歯磨きをするようになるために何が必要かという、私たち
も経験がありますが、手を替え、品を替え、味を替えても駄目で、基本的には、「一緒
にやろうね」と言って、「頑張っね、すごいわね」と言いながらやっていくと磨けるよう
になってきて、気持ちがいいことも分かってきて、自分でやるようになる。また親が、

「すごいね、自分でできて」と言うことをやって、習慣化されていくわけですね。

そうしたすごく手の込んだことをやってきたはずのものが、今は、何か全部ぼんと与えられて「これで歯磨きすればきれいになりますよ」という中でやってしまうと、子どもはちゃんと磨かなくなってしまうわけですね。

そういうことが、生活のリズムをつくろうと思えるか、ご飯をしっかりと食べて食べようと思えるか、または、頑張って勉強しようかといったこと生活習慣全般に、全部結びついているんだということになっていて、そういういい関係をつくっていかないと、子どもたちは自分からやろうとしなくなってしまうんじゃないかという話も出ているんですね。

○委員 その関係性は、コミュニケーションという言葉では変わらないの。

○副部長 本来、コミュニケーションでこれ、今、こういう形でお互いに話をしていてですね……

○委員 コミュニケーションの中身、中身があるコミュニケーションみたいなことですか。

○副部長 ですね。

○委員 表面だけではなくて、お互いに何か影響を与えようというコミュニケーションというのかな。

○副部長 だから、その前に、「ちゃんと言うよね」と言ってもらえる関係というか。もうちょっと言うと、私たちも学生に対してよくやりがちですけど、よくあるのは、大人って「そうだよね」と認めているようなふりして、最後に、「だけどね」と言っちゃうわけですね。

○委員 ああ。

○副部長 そうじゃなくて、「そうだよね」と言ったら、「じゃあ、だったらこうしない？」と言えるようになるということですね。

○委員 うーん。分からない。いやいや、言っている意味は分かるんだけど、それをどうして「関係性」という、ものすごい、ぼやーとした言葉を使って……。

○副部長 そこが、難しいんです。

○委員 学者の方たちと話していて困るのは、そういう言葉の使い方が、一般的に使っているものと違うところで使われることが多いんですよ。難しい言葉と簡単な言葉と両方あるんですけども、難しいときには仕方がないからそれは覚えるしかないじゃないですか。何とかのプラットフォームがどうのこうのと言われてね。

○委員 SDGsが……。

○委員 そうそうそう。

○委員 「S」が小文字というのは、余計分かりにくいよね。「ジーズ」だからね。

○委員 「エスディージーエス」と言わないからね。

○委員 SDGでいいのよ。だから、小文字をわざわざ……。

○委員 そう思うんだけど、世界的にそうだから、そうなっちゃっているだけの話で。だから、まず、そういうのが……

○委員 杉並区はSDGにして……

○委員 分かったから。

○委員 嫌いにならないでね。

○委員 はい。

(全員笑)

○委員 いやいや。

僕らが本当に分からなくなっちゃうのは、ふだん使われている当たり前の言葉を違う形で使われちゃうと、そこで分からなくなっちゃうんですよ。だから、その関係性が、と言ったときに、どこまでのことを、何を言っているんだろうというようなことなんですよ。

○副部長 そこも、だから、関係性と言っちゃうのは、やっぱり、ぼやっとしているからなんですよ。

○委員 ああ。それは、それは困っちゃうよね。

○副部長 どうしたらいいかって、言えないんですね。だから、どこまでいったら、じゃあ関係性ができたと言えるかということ、それぞれ違って、言えないんですよ。

なので、ある意味では、また難しい話になりますけど、承認関係と言ってみたりね。

○委員 うん。そうね。でも、そういうほうが、分かりやすいです。逆に、お互いを認め合う関係だということでしょ。承認関係というのはね。

○副部長 そうそうそう。

○委員 お互いを褒め合う関係だったり、お互いを見守っている関係だったりとか、まあ、何でもありますよね、いろんなものが。そうか。関係性の「性」が、また困っちゃうんだろうね。そこを一体どういうふうに解釈したらいいんだろうということなんだとは思いますが。でも、聞いたので、これは何かよく分かりました。

○副部長 はい。すみません。

○委員 はい。

○委員 娘が小学校低学年だったときに、サッカーの授業であって、娘なのでサッカーは好きじゃないから、ぼーっと空を見ていて、飛行機が飛んでいたの、「わあ、飛行機だ」「私は飛行機に乗って帰ってきたのかな」みたいに見ていた。サッカーの試合か練習中だったから、先生にすごく注意されて、ちゃんとやりなさいと怒られた。理由も聞かずにすごく怒られて、休み時間はなしと言われて、悲しかったという話があるんですけど。そこでは、関係性というか、承認し合えていないというか、先生は。

○委員 そこへ行くんですね。

○委員 担任の先生は、小学校2年生だと、全部の科目をおそらくやるんですよ。7歳とかなんですけれど。「どうしたの?」「空、見てた。飛行機が飛んでいたから、自分のことを考えていた」。子どもなりに考えていた、というところまでいけば関係性が理解し合えて。「駄目駄目。分かるけど、気持ち分かるけど、ちゃんとやりましょうね」ということになるけれど、頭ごなしに怒られて、休み時間も取り上げられたという。小さな例なんですけれど、そういうところじゃないかなと思うんですね。特に、承認し合えなくて傷つくのって、小さい子なんだと思うんですよ。おそらく3年生か4年生ぐらいまでの子なんですよ。

ヨーロッパだと、4年生になると自分で勉強して受験して、ハリーポッターと同じなんですけれど、自分の選んだ学校に行くんですよ。音楽をやりたいければ音楽の学校に行くし、絵をやりたいければ絵の学校に行くし、魔法をやりたいければ Hogwarts に行く、と。そういう感じで、10歳のときに決めちゃうんですけど……

○委員 それ、いろんなところから責められているシステムですよ。イギリスだけにあるシステムで……。

○委員 まあ、ドイツとかフランスも結構そういう感じですね。

○委員 そんな早く決める必要はないじゃないかなという……。

○委員 そうですね。寄宿学校に入ることに関しては、イギリスでも今すごく議論が多くて、寄宿学校制度はなくなりつつあるのは事実なんですけれど、学校制度としては、一応4年生——日本はアメリカのシステムなので6年生は12歳ですけど、10歳のときに自分で受験する形になるんですが。おそらく小学校の低学年、3年生ぐらいまでの子どもたちが一番欲しているのがその承認というものだと思うんですね。親だけじゃなくて、多くの時間を割く、学校での先生とのやり取りが大きな関係性を、そして自分の自己肯定感を高めるチャンスになるのかなというふうに感じています。

○委員 僕なんかは、そうじゃなくて、一生それは大事なものだろうと思うんで。

○委員 一生大事ですよ。うん。

○委員 みんながそういうふうになれば、学校の中でもそうなると思うんですよ。

子どもに対してやるのが大事だという話になると、みんな大人になったらもういいんだという話になるので、なくなっちゃうんだけど、そうではなくて、大人同士がみんなそういうことをやるようになれば、大人と子どももやるし、子どもと子どももやるんじゃないかなと思うんですよ。

○委員 そうですね。そのとおりだと思います。

○委員 だから、学校の中でやるのが一番大事だとは思わないし。それは、学校の中でやるのが当たり前になってくることが一番大事なので、それを学校から始めるのではなくて、違うところから始めたほうが、会社の中とか、家庭とか、そういうところのほうがやりやすいし、本当は一番必要で、承認、一番承認されたいのは、実は子どもじゃなくて、大人だと思うんですよ。みんな承認されていないんですよ。実際にね、本当にそうですよ。僕も会社を持っていますけれども、みんな「いやあ、やっぱりよくやったね」と言われるのが一番うれしいんですよ。それを、「いや、そんな仕事するのは当たり前だろう」という扱いを受けると、だんだん顔が暗くなってきて、別人のようになってしまうんですよ。だから、そちらのほうが、よっぽど大事で、そこから世の中から変えていくことのほうが、子どもにとっては大事ではないかな。

私もたくさん子どもを育てましたんで、よく分かりますけど、僕が学校の参観に行ったら一番嫌だったのは、小学校1年のときには、みんなばらばらに歩いているのに、2年生になった途端に、「はい、手はお膝」と言ったら、みんなやるんですよ。僕はやったことがないんですけども、どうしてこんな軍国主義になっちゃったんだろうと思って、びっくりしたんですよ。やっぱり、サッカーで、外や上を向いていたら怒られちゃいますよ。

○委員 でも、全部の先生がそうだったわけじゃないでしょう。だから、かつては……

○委員 いや、全部そうだったよ。

○委員 それはちょっと変わった、異常な、ひねくれている……

○委員 小学校の参観、全部行ったけど……

○委員 どのクラスの先生も。

○委員 全部それだったよ。ほんとびっくりだった。

○委員 僕は、昔はいろんなタイプの先生がいたという印象を持っているんだよね。

○委員 それは、昔の話でしょ。

○委員 いや、だから、それがだんだん慣らされちゃって、その環境が、ちょっと先生がかawaiiそうだなというのが一つあって。

○委員 うん。

○委員 夏目漱石の「坊ちゃん」は、フィクションであるけれども……

○委員 いや、だからさ……

○委員 あの感じはね、おそらく昭和40年代前半ぐらいまで結構残っていたのに、だんだん、その出っ張った教師が、いろんなところから叩かれるみたくなっちゃっていて、それがさっきの、何か承認というところの話につながっているふうな印象を僕は持ちましたね、今の話で。

○委員 副部会長がおっしゃっていた「関係性」の前に、孤立というお話をされていたんですけど、僕がちょっと関わりがある文京区の話。文京区って、一番ひどい中学校は、10人に1人が不登校みたいな学校があったりするんですけど、そこでやられている取組として、子どものつなぎ方。いきなり学校につなぐことをゴールにするんじゃなくて、まず、承認してあげる。子どものあり方を承認してあげる仕組みとしてNPOが入っているんですけど、まずは何か一緒にゲームをやるみたいなのところから、大人とつながるということを丁寧やって、その子が結局学校に戻ろうが戻るまいが、とりあえずここにいたら誰かがちゃんと見てくれるよという、居場所づくりを今進めているんですけど。

関係性の話に戻るとするならば、どことつながりたいかを選べることと、何でつながるかを選べるので、結構重要な観点かなと思いました。

○部会長 まだご発言のない委員の声を聞いてみたいと思うんですが。

○委員 こんな声なんですけど。

○部会長 ああ、ありがとうございます。

○委員 皆さんの意見を聞いて、僕もすごく考えさせられました。僕はPTAの会長を何でこんなに何回もやっているかといったら、やる人がいないからですね。保護者とずっと一緒に会議をして関わりを持っている中ですごく思うのが、やはり地域離れだと思います。子どもにはいろいろチャレンジはさせたいけども自分はチャレンジしない大人が、すごく多い感じがします。

例えばプログラミング教育というと、オペレーションの能力だと思っちゃうんですね。

だから、コンピュータの塾に通わせちゃう。でも、本来は、問題解決能力を本当は育ま

なきやいけない。つまり、昔、自分たちが子どもだった頃にはまだルールがあったということですよね。このルールに乗ればいい学校に入って、いい就職して、それで、一生安泰に暮らせると思っている。まだ、そういう感覚の大人が多くて、将来がどうなるか分からない中では、やはり、どんな問題にぶつかっても、自分たちの力で解決していく、そのような子どもをつくらなければいけないということだと思っただけですが、まず、保護者がそれを勘違いしている感じがすごくするんですね。

それで、抜け駆け——抜け駆けと言っちゃいけないのかな。リンゴをワックスをかけて磨くみたいな子育てを。そういう親が多くて。肥沃な土地をつくることも、本当は重要ですよ。地域が土地だとしたら、学校とか教育の現場というのは木で、それに、形は悪くてもおいしい実をつけるとか、そういう感覚を本当は持たなきやいけないけども、もう自分の子だけというような保護者が多いです。

P T Aで研修会をやるんですが、本来、杉並区が目指す教育方針というもので、我々は研修会をやるんですね。例えば特別支援教育とか、小中一貫教育はどういうものかということによって募集すると、地域の人も集めると100人ぐらい集まるんですが、その中にP T Aは20人くらいしか集まらないです。その内訳は、新役員と旧役員8人ずつだから、16人。だから、一般のP T A会員は、4人しか来ないんです。そのくらい無関心なんです。受験対策講座をやると、半分ぐらいが申し込む。そこが、僕の、P T Aをやっている中での課題と思っているんですね。

大人が、自分たちも学ぶという感覚をちゃんと持たないと、「卒業したらもう一切勉強しない」みたいな大人がすごく多い気がするんですけども。

○委員 僕は、大学を卒業して就職して、システムエンジニアをやっていたんですけども、やっと自分で自由にできるお金と時間が自分一人の生活空間で、と思うと「もう勉強したくない。」と思いましたよね。勉強するということ自体が、僕の時代の学校教育はすごくつまらないことだったんですよね。勉強の中身というよりも、あれをやらなきやいけない、これはやっちゃいけないというので。そうすると、仕事に関わる必要な技術は身につけるけれども、それ以外の勉強はもうしたくないとなっていた部分はすごくありましたね。何でしょうね、それは。

○委員 逃げ場がないからじゃないですか。

○委員 うん。

○委員 僕には音楽があったので、勉強は面白かったですよね。責任がない。責任がない

というか、それに一生を託さなきゃいけないという感覚が全くなかったので、だから何をやっても面白かったですけど。きっと勉強や成績に一生を託さなきゃいけない。

「何に一生を託すか」だといけないというのは、それは、すごくかわいそうなことだなと思いますけどね。そうじゃないところに自分の軸を持っていれば、本当は勉強というのは面白いもの、と思いますけどね。

○副部長 ちょっと時間が気になるんで情報だけ申し上げますと、今の話で、日本の人材の質って、実はすごく高いと言われているんですね。OECDがやっている国際成人力調査というのがあって、1位か2位で、断トツで高いんです。なのに、本人に聞くと、「自分がちゃんと役に立てるか」というと、世界最下位ぐらいなんですね。

○委員 自信がない。

○副部長 それから、「自分の今の境遇を改善するために学ぼうと思うか」というと、ほとんど意欲がないという結果が出て、開いてしまうのと……

○委員 言ったとおりなんですね。なんだけど、本当はすごいよね。本当はみんなすごい。

○副部長 そうです。本当は何かすごい力があるのに、実はやる気がないという結果が出るんですね。

それからもう一つは、人材の質は高いのに、生産性が世界第28位で、先進諸国の中で、ほとんど最下位なんですね。

○委員 生産性というのは、時間に対する、ということですか。

○副部長 ええ。一人当たりの、OECDのように、経済、DHPにかかるお金ですけども。こんなに開いている国はないと言われているんですね。なぜかという研究があって、いまだに工業社会の競争をさせているからだという結論が、ヨーロッパの研究で出てきているんですね。今、生産性を高めるために何が必要かという、競争ではなく共創、これは相関係数は0.07で、ほとんどゼロなんですね。一番必要なのは、実はアントレ・プレナーシップというやつで、日本人はすぐ「起業家精神」と訳しちゃいますが、共創していく時間数みたいな話になっちゃいますが、そうじゃなくて、本当にさっきのSDGsなんです。誰も取りこぼさないように最後から押し上げていく役割の人がちゃんといることが社会の生産性を上げることになる、ということなんですね。その意味では、競争ではなくて協調とか協働がベースで、コミュニケーションが大事だという議論になってきているんですね。どうも日本の社会って、そういうふうに切り替えられていないんじゃないかということなんです。

さきほどの、「親があんまり…」という話ですけども、あと10年、2030年頃の大学卒業生の65%が、今ない仕事に就くと言われてますから、もう親の背中を見て生きなさいとは言えなくなっちゃったんですね。また、その頃に今の職業の47%を人工知能が代替してしまって、なくなると言われてますので、雇用がなくなるんですね。レールを敷いてやるからそのとおりに生きなさいじゃなくて、自分でつくりなさいという教育をしないと、もう子どもたちは将来ないんじゃないかと、そのあたりもきちっと議論ができるといいなと思うんですけども。まあ、想像ができないですよ。ただ、あと10年で顔ががらっと変わると言われているので……

○委員 自分でつくりなさいというと、各個人がみんなつくりなさいというふうに言われているように思っちゃうので。それが、みんな、ドキッとしちゃうのかな。

○副部長 みんなでつくりなさいという話ですよ。

○委員 そうですよ。だから、「自分で」じゃなくて、「自分たちで」つくることになるんだよという言い方にしてあげないと、みんなドキッとしちゃって、もう嫌だと思っちゃいますわけですよ。

○副部長 そうですね。はい。

○委員 何となくできていくんですよ、きっとね。

○副部長 だと思えますね。

○委員 それは、もう間違いないと思いますよ。そこを、大人があんまり不安に思っていると、子どもはもっと不安に思いますからね。

○委員 僕らはこういう話をする必要ないんじゃないの、もう。

○委員 まあ、そう……

○委員 それを言っちゃ、元も子もないです。

○委員 大体そうだよ。ない職業があったからね。

○部長 どうですか、この議論について。

○委員 そうですね、人生100年時代とかいろいろ言われますけど、自分で学ぶ力というのはやっぱり重要なのかなと思って。例えば、小学校で社会を学びました。理科を学びました。それは中高ずっと同じで、それももちろん大事ですけど、それよりも、何かが必要になったとき、自分が仕事に就いて、これから新しい何かをやるうとするときの自分から学ぼうとする意欲もそうですし、そのときにいざ学んでいこうというその力というのは、やっぱり重要なのかなと思って。

ただ、例えばこの教科として教えられてそれをやるという、ただ与えられた今の学校教育の中では、その力は育たないと思うので、それをどういうふうにやっていくのかというのは、この部会でも議論していくべきなのかなと思います。これから先10年先、20年先と
いうのを考えていくなら、そうだと思います。

○部会長 ありがとうございます。

今の少子化について、池本さんが言っているのが、何で今子どもが少ないか、産まないのかということ、今の子どもが幸せそうに見えない。こういう子どもしか見えないから、子どもを欲しいとは思えないというようなことにもつながっているんじゃないかということ、早稲田の喜多先生が学生にアンケートを取ったら、自己肯定感を持っているのは56%しかなかったと。

○副部会長 高いですね。

○部会長 全国平均からすると、高い。ただ、喜多先生に言わせれば、日本の中で勝ち組にある大学の学生が、たった56%しか自己有用感を持っていない、さらに言うと、20%は、今消えられるならここから消えたいと、早稲田の学生は思っている。まさに日本の競争の中で勝ち抜いてきた早稲田の学生もそういうような状態なのか。であるならば、もっと別の、もっと違う子どもたちが、日本の子どもたちは45%ぐらいが自己肯定感を持っている。諸外国は80とか90%あるのにと。なぜそうなのかというね。

増山先生という人が、学童クラブで子どもたちを指導員が遊ばせていた。で終わって、子どもたちが言ったことが、「じゃあみんな遊ぼうぜ」と。漢字の「遊び」と平仮名の「あそび」で分けて言っているんですけど、大人が指導して遊ばせている。それは主体性も何もなく、自分たちが面白いから遊んでいるんじゃない。指導が終わって、自分たちの好きな遊びをしよう。それは平仮名の「あそび」だという、そういったところを何か間違っているところがある。

ある人が、幸せって何なんだろうかと、幸せの国ってどんな国なんだと。キプロスに生涯教育で行って戻ってきた先生に聞いたら、「僕の考える幸せな国は何かと聞いたら、子どもたちが何の心配もなく喜々として遊べる社会が幸せな社会だと思う。」と。その物差しからすると、日本は経済的に豊かになったかもしれないけども、本当に子どもたちが喜々として遊べるような環境があるのか。子どもたちの犯罪って、2時から5時に犯罪が起きる。児童遊園、児童公園があったって、地域の中で子どもたちがいない。それは3間の喪失なんて言われているけど、遊ぶ時間、遊ぶ仲間、遊ぶ空間。ある人は世間もなくなっ

たと。四つなくなったんだというふうなことを言うけれど、そういうような中で、子どもたちだけで遊ぶというのが犯罪に巻き込まれるから、親は子どもだけで外で遊ばせるということもできなくなった。まさに社会的ネグレクトが起こっているというようなところからすると、この杉並の子どもたちが喜々として生きられる、自分の意思で生きられるとか、生活できるとか、そういうような社会を、地域を、仕組みをどうつくっていいのかというところですね。そこにスポーツがあったりとか文化があったり、いろんなことを入れながら、それらはみんな関わり合うというような、その手段であるんだろうなと。

よく、やり取りが必要だと。今までは、一方的な「やりやり」、もしくは「取り取り」で、やり取りがなかったという。そういうやり取りをしていくというところに関係性が生まれていくんじゃないかなと思うんですが、そんなことをこれから、2回目、3回目、4回目と議論ができればいいかなとは思っています。

今日は皆様のご意見を事務局に整理していただきながら、第2回目につなげていければと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、事務局からどうぞ。

○子ども家庭部長 今日、長時間、様々なご意見を頂いて、ありがとうございました。我々も日頃なかなか気がつかない点、いろいろ深く考えさせていただくご発言が多々あって、大変勉強になりました。

冒頭、皆様に部会の進め方のご承認を頂きましたけれども、第5回目は12月末に開催したいということで申し上げましたが、この後、事務局から日程調整の紙を配らせていただきますので、お帰りの際にご提出いただくか、10月30日金曜日までに、メールまたはファクスで事務局宛てにご提出いただければと思います。

次回の日程は、11月9日月曜日、6時からです。子ども・子育てをテーマにご審議いただくということになりましたけれども、子ども・子育てを切り口にしていろいろと多岐にわたってご議論いただきたいと思ひますので、またよろしくお願ひしたいと思ひます。

以上でございます。

○部会長 はい。

○企画課長 すみません。事務連絡が二つございます。

今日、席上に封筒をお配りしております法定調書です。源泉徴収、給与所得の源泉徴収票の法定調書を作成して、区で税務署に提出をする関係で、マイナンバー、個人番号の記載、それから個人番号の提供を区にさせていただくということのために必要な書類というこ

とで、お示しをしております。封筒の中をご確認いただければと思います。何か不明な点があれば、事務局のほうまでお問い合わせを頂ければということです。

もう一点は、皆さんから、部会で審議したい内容、キーワードを頂いたときに、データのご要望を頂いた方も何名かいらっしゃったかと思います。そのデータ、それから今日お配りをした資料に関しても、なるべく早く公式ホームページにも載せていきたいと思ってございます。

ただ、頂いたご要望のあるデータの中で、調査を区でしていない、データがないもの、あるいはちょっと時間がかかり、今、データとしてお示しをすることができないものも一部ございますので、ご要望にお応えできないデータがある場合には、個別に事務局から、ご連絡させていただきます。個別のご連絡がないものはデータとしてお示しするというところでご了解いただければと思います。以上でございます。

○部会長 はい。ありがとうございました。

本日は長時間にわたりまして、貴重な多くのご意見を頂きまして、誠にありがとうございました。そして、種々ご協力いただきましたことに感謝申し上げたいと思います。

それでは、本日の会議はこれにて終了いたします。ありがとうございました。